

感性を育む和学講座

～ 3. 端午の節供とお辞儀の歴史～

端午とは、五月は旧暦（中国暦）では午の月にあたり、五月の最初の午の日を表します。

・ 古代中国の屈原崇拜

紀元前 278 年に楚の家臣である屈原が失脚して川に身を投げたのが五月五日であったので、屈原の供養が端午節となったという説がありますが、信ぴょう性が疑われています。

・ 五月五日は実は女性の節供？

日本では、女性が田植えの前に穢れを祓うために菖蒲や蓬で葺いた家に閉じこもって過ごすという風習がありました。男性は前日から戸外に出払っていました。

この風習は近松門左衛門が五月五日のことを「女の家」と述べています。



・ 男子の節供

現代では男の子の成長を祝い、健康を祈る節供となっています。

鎌倉時代になると菖蒲と尚武をかけて、また菖蒲の葉が剣を連想させることから、男の子の節供と江戸時代に制定されました。

武家では鎧、兜などの武者人形を飾っていました。鯉のぼりは庶民から出た風習です。



・鯉のぼり

武家の幟を飾る風習を、江戸時代に商人が幟の竿頭に中国の登竜門にちなんで鯉を象ったものを掲げたのが広まりました。また、商家に男子が生まれたら幟を上げる風習があったからという説もあります。



・くす玉

五月は旧暦では、梅雨時期です。中国では「悪月」「忌み月とも云われていました。

そこで、薬草を摘んで丸く固め、軒下に吊るすという風習もありました。薬玉がくす玉の原点です。

・薬狩り

611年推古天皇の御代に宮中で薬狩りを行った記録が「日本書紀」に残されています。

また、天智天皇の御代668年にも近江の蒲生で宮中で薬狩りが行われました。薬狩りとは、男性は鹿の角を狩り、女性は薬草摘みをします。

この時に詠まれた有名な和歌があります。

あかねさす紫野行き標野行き 野守はみずや君が袖振る

(額田王が大海の皇子に贈った歌)

紫草のにはほへる妹を憎くあらば 人妻ゆえにわれ恋ひめやも

(大海の皇子が額田王の歌への返歌)

・現代の五月五日

現代は「こどもの日」として祝日で休日になっています。

1948年2月に国会で討議され、1949年から祝日になりました。

祝日法2条では「こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに母に感謝する」となっており、**日本の母の日**といえます。



お辞儀の歴史

お辞儀とは日本では挨拶、お礼、お詫びなど、深い気持ちを表す型の一つです。

・古代から平安時代

魏志倭人伝には「倭人は大人に拍手して跪いてお辞儀をする」と、慎みや敬う姿が記述されています。

現代の座礼のような形だったお辞儀は、天武天皇の時代に唐文化に倣って立礼を取り入れ、立礼が一般的になります。

公家が中心の時代は、公家は下位者に対してお辞儀はしません。

位の高い人の衣装を扱う衣紋者は、公家にお辞儀するときは手を膝の上に置いたまま、より丁寧にするときは、手の甲を床下につけて行ったようです。

手のひらは、高貴な方の衣装をさわるので汚れないようにとしたのです。

・武家社会でのお辞儀

鎌倉時代になると、武家が政治の中心になります。武家にとって、自分の権威や存在価値を将軍や領主に表す必要があるため、遠くからもわかるように、大きな所作、お辞儀をするようになりました。

室町から安土・桃山時代になると、茶の湯文化が形成され、茶室では上下関係がなく、また狭い茶室でのお辞儀は小さな身振りとなります。

平和な江戸時代では、畳が曳かれるようになり、正座がかしこまった座る型とさ

れていきます。

・明治から現代

明治時代に西欧文化を取り入れ、今のお辞儀の形となっています。

美しいお辞儀は、姿勢良く立ち、座ることが基本となります。

立礼は手を横に、肩の力を抜いて、腰から前屈させます。

前屈するとき息を吸い、下で止まった時に吐きます。

前屈する深さによって、腕が前に自然にきます。人の骨格や力学的に添った動きとなっています。

肘を張り、前で手を組んで行うお辞儀は美しくはありませんし、日本のお辞儀ではありません。

日本の正しいお辞儀
立居振る舞い
礼儀作法

宗家 三十一代 小笠原清忠

小笠原流

立ちは自然体
身体の前で手は重ねません
重ねないので
肘ははりません
手を重ねないので
お辞儀をした時
手が股間にあたることはありません
手の形をアピールしません
腕や手の力は抜き
自然に下ろし
両ともに添わせませ

出会った相手
だけでなく
出会ったことすべてに対して
感謝と敬う心で頭を垂れる
それが日本の礼法：

※神道の作法の普通礼も
小笠原流と同じです
※神道の作法にある
「叉手(さしゅ)」は
お辞儀とは別の作法です

※下記入門書の
「立ち姿・お辞儀」の
イラストをお借りしました

小笠原流礼法入門
小笠原清忠著
2007年発行

昭和の時代までは 誰でも自然に身についていた日本の礼儀作法